



じい様が行く 1

『いのちだいじに』異世界ゆるり旅

α L P H α L I G H T

蛍石
Hotaruishi

アルファライト文庫



主な登場人物

ルーチェ

五歳くらいに見える
女の子。
どある事情から
セイタロウに
預けられることになる。

イスリール

セイタロウを異世界に
転生させた神様。
人はいいが
うっかり気味。

カルフェ

フォスの街の
商業ギルド職員。
専門分野では
中々の優秀さを
見せる。

アディエ

フォスの街の
商業ギルドマスター。
商売上手な才媛。

セイタロウ

日本で茶園を
経営していたじい様。
年の功と神様から
貰った超スキルを引つぎ、
異世界で旅に出る。

ジルク

フォスの街の
警備隊長。
割と肝が据わっている。

ゴルド

フォスの街の
冒険者ギルドマスター。
体格の割にかなりの
小心者。

《 1 呼ばれたじい様 》

「少年よ。この世界で勇者になってくれまいか？」

目の前の青年が妙なポーズを決めながら言った。

こちらを指差しながらも顔は天井てんじょうに向けている為、分かっていないようだが……

良く見ずともここにいるのは老人ただ一人。

少年なんておらん。

「お主ぬしは誰じゃ？」

「へ？」

僕の問いに気の抜けた声が返ってくる。

ここでやっと青年はこちらを視認しにんしおった。

「そしてここはどこじゃ？」

「えと……ボクの、部屋です」

今度の問いかけには答えてもらえたわい。

今いるのは真っ白い部屋。何にもないだっ広い部屋。

そこで青年と二人、向かい合っておる。

「あれ？ お爺さんは誰ですか？ アサオタクミ君を呼んだはずなんですが」

「タクミは孫じゃが、お主は誰なんじゃ？」

困惑顔の青年に再度問いかける。

ここで何故孫の名前が出てくるのかも疑問だが、自分の知らない交友関係があっても不思議ではなからう。

疑問は一つずつ解決していけば良い。

「ボクはイスリールって名前の神です」

「その神様が孫に何用じゃ？」

「そちらの世界で不慮の死を迎えたタクミ君をこちらの世界へ転生させようかと」

「タクミは死んどらんぞ」

孫を勝手に死んだことにするな。まったく失礼な。

夜中に物音がしたから目が覚めてしまい、見に行ったらタクミの部屋に見知らぬ男が入ろうとしたりしたんじや。

そこで「誰じゃ！」と言ったらこちらに刃物を見せおったわ。

タクミの「いいちゃん？」って声が聞こえ、男が部屋に入ろうとしたから、思わず飛び掛かったんじや。可愛い孫に何かあったらと思ったら身体が勝手に動いていたわい。揉み

合いで刺されたのか、腹に激痛が走ってな。

そこで記憶は途切れとる。

「あれ？ 強盗に刺されて亡くなっちゃう流れだったのに」

「強盗に刺されたのは儂じゃろう。この老いはれがタクミの身代わりになったんじやて。爺より先に孫が逝くなんてあっちゃならんから良かったわい」

死んだこと自体は残念だが孫を救えたなら本望じゃ。

「え？ ってことはボク、間違えてお爺さんをこっちに呼んじやったの？」

「そうなんじゃろうな。儂がここにおるんじやから」

「一度呼んじやった魂は戻せないのにどうしよう……」

悩み出すイスリール。

戻れないのか。

孫の無事な顔が見られないのは残念じゃが仕方ない。

「のうイスリールさんや。儂が転生すれば問題は丸く収まるのかのう？」

「全てが丸くとははいかないですけど、ある程度は」

「ならば転生しちゃうわい」

「いいんですか？」

「転生しないでこのままここにいろわけにもいかんじやろ」

「いやまあ確かに。うやむやにしてここにずっといさせるのも悪いですし」

それは単なる問題の先送りじゃろう。そんなの日本で嫌ってほど見とるわい。

「転生となると赤ん坊になるのか？　あと記憶はどうなるんじゃ？」

「お爺さんの記憶を残して赤ん坊から始めるよりは、ある程度大人のほうがいいんじゃないでしょうか」

記憶は残せるようじゃな。

「なら今よりも少し若くしてくれんかい。爺の精神した青年じゃおかしいじゃろうからな」

「分かりました、そうしましょう」

目の前に2メートルくらいの光の円柱が現れる。

「肉体を再構築します。希望があればなんでも聞きますよ。こちらの全面的な非ですから」

空中に画面みたいなのを出して何かを入力するイスリール。

「言葉で苦労はしたくないのう」

「全言語習得させます。あと一般常識的な知識も入れときます。補助的な意味で鑑定能力も付けときますよ。なんでも簡単に調べる（しら）べることができますよ」

「すぐ死ぬのも嫌じゃ」

「ステータスを天災級モンスター並みにします」

「痛いのは嫌じゃ」

「肉体、精神の攻撃耐性、異常耐性を付けます」

「魔法があるなら使いたいのう」

「全魔法系スキルを付けます」

「攻撃より回復やら補助がいいのう」

「ならばボクの加護（かご）も付けます。ボクは攻撃が苦手（にがて）なのでそちら方面に強いんですよ。一応攻撃も全属性の初級ならできますし。生活魔法も便利だから付けときます」

「あととはたくさん物を仕舞えるアイテムボックスみたいなのがあると嬉しいんじゃないが」

「アイテムボックスは時空間魔法で似たことができますよ。そちらの【無限収納（イニベンクトリ）】のほうがいい勝手いいですし」

ここまで一気に思いつくまま言ってみたんじゃが、全て通ってしまったわい。かなりのチートに仕上がってると思うんじゃないかな。

「ところでお爺さん、妙に詳しくないですか？」

「タクミと一緒にオンラインゲームやっとなったからの。堅苦しい小説にも飽（あ）きてライトノベルも読んでたから、それでじゃな」

純文学、ミステリ、時代、大河。どれも面白（おもしろ）いんじゃないが飽きてしまつての。

タクミに借りて読んだのがこんなことに役立つとは思わなかったわい。

「ああ、それですか。あと何かありますか？ これだけは欲しいモノとか」

「あつちの世界にお茶はあるかのう？ それだけが心配じゃ」

「お茶はありますが日本のモノのほうが断然美味しいですね。じゃあ特殊スキルで〈朝尾茶園〉付けましよう。これで好きな時に買えますよ」

「朝尾茶園って僕んとこの店じゃが」

「はい。お爺さんのトコに繋げて買い物できるようにします」

自分ちのお茶が飲めるとは嬉しいことじゃ。

「あといろいろ困るでしょうから【無限収納】に当面のお金と便利そうなアイテム入れますね」

「ありがたいのう」

至れり尽くせりじゃな。

「他に聞きたいことありませんか？ 精神と肉体の癒着に時間がかかりますから、しばらくお会いできなくなりますよ」

「しばらく？」

「はい。神殿で祈ってもらえばお会いできますから」

軽い神様じゃのう。そんな簡単に会っていいものなのか？

日本に限らず地球じゃひと騒ぎになる案件じゃぞ。

「最初に言ってた勇者云々はどうかのじゃ？」

「それは大丈夫です。他にも勇者候補はまだいますから。ただ、もし上手くいかなかったらお手伝いだけはお願いますかもですけど」

「手伝いくらいなら構わんぞい。ここまで我が俤聞いてもらったんじゃからな」
勇者になるのがこんな爺じやいかんじやろう。

ならなくていいならのんびり暮らそう。

「最後にお爺さんの名前を教えてください。ここまで聞くのを忘れてました」

「晴太郎、朝尾晴太郎じゃ」

「セイタロウさん。ではボクの世界フィロソフでまたお会いしましょう」
イスリールの笑顔を最後に、僕の意識は闇に落ちていった。

《 2 森で生きている 》

目が覚めるとそこは土の上じゃった。

……地面に直で寝ていたようじゃ。

とりあえず毛布に包まっていたが。

「地面にそのまま横になるのは久しぶりじゃな」

茶畑での作業の合間(あいま)に横になることはあっても、そこはゴザなどを敷いた上でのこと。公園などの芝生(しばふ)に寝転ぶのはタクミが小さい時にはあったが、地面そのままとすると若い頃のヤンチャ以来になるか。

よくよく周りを見渡してみると、ここは洞穴(ほらあな)のようで入り口からは光が差し込んでおった。

「とりあえず外に出てみるかのう」

スツと立ち上がり、そのまま外へと向かうが、特に痛みも出ないので、寝ていたのもそう長くはなかったのかもしれないな。

外へ出る時、何かの膜(まく)を抜けたような感覚に襲(おそ)われた。

「何じゃ？ 何かあったのか？」

また中に戻ると、再び同じような感覚がある。

「よく分からんからひとまず放置じゃ」

もう一度外へ出て周りを見渡せば、そこは木々が生(お)い茂(しげ)る森じゃった。

月(つき)が二つ見えたので夜なんじゃろな。

「月(つき)が二つとはこれまた面白いのう。やはり異世界というヤツなんじゃな」

二つの月に驚(おどろ)きはするが、違和感(いかん)はない。

その辺りが知識(ちしき)が刷(す)り込まれている証拠(しょうこ)なのかもしれないな。

洞穴(ほら)を振り返ってみると、そこは小さな祠(ほこり)のようじゃった。

「あの神様(かみさま)を祀(まつ)る祠(ほこり)なんじゃろうな」

いきなり儼(げん)を街へ出現させるわけにもいかん。しかし平原や広野、森の中にそのまま寝かせるわけにもいかん。

苦肉(くにく)の策(さく)で、自分の祠(ほこり)に寝かせておく。そんなことじゃろ。

「ならあの膜(まく)は魔法なんじゃろな。バリアとか結界とかその辺りかの」

顎(あご)に手を当て、少し考えていると……

グルルルルルツ。

何かの唸(うな)り声(こゑ)が聞こえたと同時に、背後の木がメキメキ音を立てて倒れていく。

「何(なん)じゃ？ いきなり魔物(まぶつ)か？ 準備(じゅんび)くらいさせてくれんかのう」

愚痴(ぐち)ったところで状況が変わるわけもなく、木が倒れた場所には赤毛(くま)の熊(くま)がいた。

「レッドベアが最初の敵とは、なんともまあおかしな話(わ)じゃわい」

イスリールにもらった知識によると、レッドベアは初心者殺しとも言われる獠(ろう)猛(もう)な熊(くま)。

魔物の危険度ランクCに分類されており、中位ランク冒険者までは複数人で狩(か)るのが前提(ぜんまい)な魔物(まぶつ)だそうじゃ。

「見逃してくれるわけもあるまいて、なんとか倒してみるかのう」
こちらを獲物として認識している以上、逃げの一手では難しい。
確認もなしのぶっつけ本番だが、やるしかないじやろう。

《束縛》

レッドベアの手足に無数の蔦が絡まる。

それでもなんとか抜けようともがき、こちらへ向かおうとする。

《氷針》

小手調べの初級魔法を唱え、放つてみる。森の中でいきなり火はいかんじやろう。

長さ30センチほどのつららが十数本レッドベアに飛んでいく。全弾命中するとレッドベアは苦しうに悶えながら倒れる。

上半身につららが刺さったまま動かないレッドベア。

「ぬ？ 終わりか？」

そつと近付き確認すると、息絶えていた。

レッドベアの死体を【無限収納】に回収して周囲を見回す。
特にこちらに向かってくる気配はなし。

「祠の中でとりあえず自分のステータスチェックをせんとな」
祠に戻りながら儂はそう独りごちていた。



《 3 じきるじぶ じきなこと 》

「ステータス、スキルの確認をせんとダメじゃな。あと持ち物は何があるんじやろか」
祠の中に戻ってまずは確認作業から。

「オープン」

声に出すと、システム画面のような半透明の青いパネルが目の前に現れる。

「まるでゲームじゃな」

ステータスは天災級モンスター並みとか言っとったし、これで高いんじやろくな。
HP、MP、知力に素早さも、数値が全部1万超えとるしのう。

あとはスキルのほうかの。

【名前】アサオ・セイタロウ（朝尾晴太郎）

【種族】たぶん人族

【年齢】63

【レベル】9

【スキル】属性魔法 Lv.50 無属性魔法 Lv.100 時空間魔法 Lv.100 生活魔法 Lv.100

各種異常耐性 Lv.100 各種攻撃耐性 Lv.100 無詠唱 Lv.100

鑑定 Lv.80 解体 Lv.50 農業 Lv.73 料理 Lv.23 杖術 Lv.50

【特殊】朝尾茶園

【加護】主神イスリール（極大）

【称号】界渡り 人間離れ 主神の恩寵

種族が「たぶん」ってなんじゃ？ たぶんって。

年齢は、おお、10歳も若返つとる。

レベルは……さつきレッドベア狩ったから上がったのかのう。

スキルも言ったものは全部ついとるな。農業と料理は日本でやってたから付いてるんじやろうか？

スキルはレベル10で一般的、30で職人、50でベテラン職人、80で超一流、100で最高じゃな。

〈朝尾茶園〉はお茶が買えると言ってたのう。

ゲームだと加護は神様からの恩恵って扱いだったんじゃが……

ん？ イスリールは主神じゃったのか。じゃあ一番偉いんじやな。

その割には単純な間違いしとったしのう。うっかり神なのかもしれんな。

称号は何の効果があるか分からんな。まあどれもなんで付いたかなんとなく分かるから大丈夫じゃろ。

さて魔法の確認じゃ。

《属性魔法》は風火地水に光闇の六種じゃな。

どれも使えるのは初期の魔法だけじゃが、さっきの威力を見たらそれで十分じゃろ。

《無属性魔法》に回復、補助、支援が含まれておると。

この祠の結界のように効果絶大ななんじゃろうな。レッドベアみたいな魔物がいるのに入ってこないのが、突破できないほどの防御力の証じゃ。

回復系に蘇生魔法まではないんじゃないかな……それでも部位欠損まではなんとかなりそうじゃ。

補助、支援系はどうじゃ？

バフ、デバフ共にいいものが揃っておるのう。相手に使われたら嫌なモノばかりじゃな。まあそういったモノで立ち回るのは面白いからの。楽しみじゃ。

《生活魔法》は便利そうじゃな。照明、火付け、掃除、洗濯、乾燥などの細々としたことができるとは。

あと地味ながらも《無詠唱》のスキルがあるのはありがたいことじゃ。

魔法は格好いいんじやが、呪文を口に出すのは恥ずかしいからのう。イスリール、ぐつじよぶじゃ。

魔法の名前も言わないで良さそうなんじやが、完全に無言つてのも味気ないしのう。なんの魔法を使うか言うくらいなら恥ずかしいからいいじやろ。

これなら無理に戦わなくてもなんとかなりそうじゃ。
足止め、拘束して逃げてもいいし、状態異常にして逃げるのもありじゃな。それでも向かってくるなら攻撃すれば問題ないじゃろ。

正当防衛じゃよ、正当防衛。

さて残るは【無限収納】の中身の確認じゃな。

ほう、ステータスと同じようにパネルで一覧表示されるのか。ソート機能まであるとは便利じゃ。

イスリール、ここもぐつじよぶじゃ。

食料、装備、テントなどの野営道具、調理用具一式、お金800万リル……は、はつびやくまん!?

イスリールさんや、多すぎんか？ まあケチる神様よりかはいいんじゃないやうが、ずいぶん大きな額じゃのう。ひと月いくらで生活できるか分からんにせよ、1リル1円としても

最初に持つ額じゃないと思うんじやよ。

それとも物価が高いのかの？ その辺りは街に行ってから確認じやな。

最後は装備じや。

と言いつつも【無限収納】から出したのは急須とお茶。

生活魔法《浄水》で水を出して急須に入れ、同じく生活魔法の《加熱》で急須ごと温める。

「一服してから装備品の確認じや」

ついでに茶請けの煎餅を出して小腹を満たす。

「ふう。日本人は緑茶じやのう」

まったく。

のんびり。

「さて装備じや、装備」

濃緑色のロープ、葉っぱが一枚付いている枝、茶色のエンジニアブーツ、ペンダント、指輪、黒色のとんがり帽子、カーキ色の肩下げ鞆。

これで一式かの？ しかし枝？ 杖じゃないのかの？

枝を手に《鑑定》と念じると、枝の鑑定結果が表示される。

それと同時に枝は杖に形を変えた。

【名前】世界樹の杖

【効果】破壊不可。魔法の威力が上がる。名前、ステータス、効果の全てを隠蔽。ただの木の枝に見せる。

使用者固定・アサオ・セイトロウ。

ん？

世界樹？

それって貴重なんじや……イスリールさんや、やりすぎじゃないかの？

ロープ、ブーツ、ペンダント、指輪、帽子、鞆も気になり鑑定すると、どれも破壊不可、使用者固定で高品質の一級品。もれなく隠蔽効果付き。鞆はアイテムボックスになつておつて、【無限収納】と同じくたくさん仕舞える上、この中では時間が経過しないという優れたものじや。

気前よすぎるじやろイスリール。

【無限収納】があるのにアイテムボックス？ と思ったが、そこは希少性の差を誤魔化す為じやな。

【無限収納】持ちは数百万人に一人。対してアイテムボックスはかなり高価ながらそれなりに出回ってるらしいからのう。

貰えるもんは貰うし、使えるもんは使う。

これは街へ着いたら神殿で祈るべきじゃな。

でもまず今声に出しておこう。

「イスリール、ありがとう。大切に使用してもらうからの」

ステータスと装備の確認はこれで終わりかの。

近接戦闘はしないほうがいいじゃろな。ステータス的に問題なくてもしたくないわい。

「素直に足止め、拘束からの逃げを基本に『いのちだいじに』じゃな」

さて方針も決めたことじゃし、街に向かうとするかの。

地図は【無限収納】に入ってたし、何かないものかのう。

そこで出しっぱなしだったステータス画面が目に残る。その端にマップ機能のタブを見つけた。現在地と周囲の地図が表示され、拡大縮小も出来る便利仕様じゃった。

イスリール、またしてもぐっじよぶじゃ。

今いるのがこの森のこの祠で……はほう、ここはジャミの森と言っくんじゃな。

一番近くの街だと……南東にあるスールの街かのう。距離は分らんが目見当だところじゃな。

よし目的地も決まったんじゃ。明日はスールの街に向かおう。

今夜はこの祠で過ごせば安全なはずじゃ。

ならあとすることは食事と睡眠じゃな。

【無限収納】からすぐつまめるものをみつこう。

夜更けまでのんびりまったり一服タイムは続くのじゃった。

《 4 街へ行くう 》

祠で一夜を明かして翌朝。

茶畑と家庭菜園の手入れを日課にしていたおかげか、朝も早くから目が覚めるんじゃよ。祠から表に出て大きく伸びを一つ。

夜露に濡れた森はしっとりしていた。日差しもしつかり届いているが、周囲には若干の朝もやが漂う。

その中で日課のラジオ体操第2をこなしていく。

ちゃんと覚えているでもなく、なんとなくあやふやな記憶の体操でも、毎朝の日課はこなさないと気分が優れないのじゃ。

「朝から森の中で体操とは気分がいいのう」

ひと通りの運動を済ませて朝食。【無限収納】からおにぎり、漬物、急須、お茶を出す。

「すぐに食べられるものが入ってるのは便利じゃな」
異世界に来てまだ二日目。【無限収納】からはお茶に煎餅、おにぎりに漬物まで出てくる始末。まだ不自由さは感じておらん。

「とりあえず南東のスールの街へ向かうかの」

【無限収納】に毛布や急須を仕舞い、身支度完了。

祠に忘れ物がないのを確認し、イスリールに札を言ってお発。祠を一晚の宿代わりに間借りしたしのう。

森の中は木々が生い茂っておった。

マップを確認しながらのんびり歩き、時たま出てくる魔物には足止めをかけつつ逃げる。足止めが効かなかった魔物は慌てずに各種初級魔法で退治。

「ほぼ一撃で退治できるのはステータスのおかげなんじゃろうな」

退治した魔物を【無限収納】に仕舞い、また歩き出す。

疲れたら周囲に《結界》を張り一服。トイレ、食事、睡眠時にも《結界》は大活躍じゃ。あとトイレは土属性初級魔法が《穴掘》だったんで助かつとる。これは戦闘時の落とし

穴にも使える優秀な魔法じゃ。

《穴掘》で作った穴に用を足し、《清浄》で綺麗にして、穴を埋める。

《浄水》で尻を洗うのも試したが問題なくできた。

日の出に起きて歩き出し、夕方になると大きな樹の下や岩陰、洞穴に入って《結界》を張り、その中で睡眠。

一日あたり数匹の魔物を狩り、歩き続けること五日目の昼前。

ようやく森を抜けて街道らしきものに出る。

そこから数時間歩くとスールの街が見えてきた。

「この五日間、風呂に入れなかったのが地味ながら苦痛じゃった」

風呂の代わりに《清浄》を自分にかけて、絞ったタオルで身体で拭いていたので身綺麗なんじゃが、温水を浴びて湯船に浸かることができないのがこんなにもどかしいとはの。この辺りは日本人のままなんじゃな。

スールの街は周囲を高い壁に囲まれた街じゃった。

入り口である門は開いていたが、傍らに門番二人が立っておった。

「爺さん、観光かい？ 身分証の提示をお願いしていいか？」

「田舎から物見遊山でいろいろ巡ろうと出てきたんじゃ。身分証がないんじゃが、どうすればいいんじゃ？」

「身分証もない田舎からかい。そりやまた珍しいな。ならばの身分証を作るから一緒に来

てくれるか?」

「お願いするのじゃ」

門番に連れられていった先は小さな小屋じゃった。

中に入ると、手のひら大のガラス玉のようなものを目の前に差し出される。

「これを持ってくれ」

言われた通り持つが何の変化も起こらない。

「犯罪歴はなしと」

ガラス玉に変化があると取り調べになるそう。その時は、仮身分証も発行されずそのまま御用になる流れらしい。

一種の魔道具なんじゃと。しかもガラスでなく水晶だそうじゃ。魔力を中央のネットワークに登録されて一括管理されてるらしく、大きな街だと五歳くらいの子供から登録するんだそう。

「通行料と仮身分証の発行代で20000リルだ」

「じゃあこれをお願いするのじゃ」

肩から提げている鞆から銀貨二枚を出して払う。

「爺さん、仮身分証をなくさないでくれよ。再発行するにもまた金がかかるからな」

この世界のお金の単位は、十進法でケタが上がり、硬貨が変わる。

一番下が石貨の1リル。そこから鉄貨、銅貨、銀貨、金貨、大金貨、白金貨と上がっていく。一番上の白金貨一枚で100万リルなんじゃと。そんな硬貨使う機会あるのかのう?

「正式な身分証はどこで発行できるのじゃ?」

「市民じゃないから、冒険者ギルドか商業ギルドに登録すればもらえるだろうな」

「そこに行つて登録してみようかの」

「正式登録が済んだら仮身分証はここに返しに来てくれ」

「分かった。いろいろ助かったわい」

札を言い小屋をあとする。

ついぞと言つてはなんだが、風呂のある宿屋を聞いたら、ないと言われた。水桶で済ますのが普通らしい。《清浄》があるので風呂に入るのは贅沢なんだそうじゃ。とりあえずオススメの宿屋を聞いたのでそこに泊まろうかの。

その宿屋は大通りから一本路地を入った所にあった。

宿に入るとおぼちゃんが出迎えてくれた。儂よりかなり若そうじゃ。

「泊まりたいのじゃが部屋は空いとるかのう?」

「一泊二食付きで50000リル。食事なしなら40000リルだよ」

「なら食事付きで一週間お願いするのじゃ」

「はいよ。お爺さん、前金だけで大丈夫かい？」

「大丈夫じゃ。これで合ってるかの？」

お代を払い水桶を追加で頼む。水桶一杯で1000リルじゃった。

夕食までまだ時間があるらしいから、とりあえず身綺麗にして一服じゃ。

そのあと神殿と買い物じゃな。

神殿来ると、中には石像が数体立っていた。

正面の石像の顔立ちがどことなくイスリールに似てる気がするの。

その前に立ち、目を瞑る。すると周囲の音がだんだんと消えていく。不思議に思い目を開けると、そこはイスリールのいた部屋じゃった。

「こんにちは、セイタロウさん。無事で何よりです」

イスリールは爽やかな笑顔を見せていた。

「イスリール、いろいろありがとうのう。いや、イスリール様かの？ 主神様じゃし」

悪戯っぽくそう告げると苦笑された。

「今まで通りで構いませんよ。主神と告げなかったのはわざとですから」

「しかしイスリールや、少しやり過ぎでないかの？ お金にしる装備にしろ、十分過ぎる

わい。ただでさえステータスやスキルでかなりの無理を言ったはずじゃのに」

「いえいえ、それこそお詫びでしかないですから」

「ならいいんじゃないのう。イスリールに迷惑かけてたらすまんからのう」

好き放題言い過ぎたと、ステータスの確認をした時に思ったのじゃよ。

「セイタロウさんならステータスもスキルも、もちろん装備だって悪用しないと思ってますから」

そんな笑顔で信頼の言葉をかけられたら裏切れんじやろ。

「まあのおんぴり過ごすだけじゃから大丈夫じゃろて」

「はい、のんびりしてください。何か困りごとがあったらまた神殿に来てください。できるだけ力になりますから。あ、困りごとなどなくても祈ってもらって平気ですからね」

爽やか笑顔のイスリール。話し相手が欲しいいい様でもあるまいに。

「困りごとが起こらないように気を付けるのじゃ」

そう告げると周囲の音が戻ってきた。

また暇な時にでも来てやるかの。

神殿で用を済ませ、残るは買い物。欲しいモノは日用品、下着などの衣類。あとはすぐつめる食料をいくらか。料理はできるが、自分の分だけじゃと面倒じゃからの。食材よ

り出来あい物じゃ。

ひと通りの買い物を終えて宿屋に戻る。

部屋で自分に《清浄》をかけていると、夕飯だと声をかけられた。そこで分かったのじゃ。この世界がパン食文化だということが。

パン嫌いじゃないが、パンだけとなると寂しいのう。

しかもどれ食べても塩味じゃ。肉も野菜もスープもどれもが塩味なんじゃ。

不味くはないんじゃ。

美味いんじゃ。美味いんじゃが全部同じ味とはのう。

イスリールに貰った調味料使って自炊も考えないとダメじゃなこれ。

その後は部屋へ戻り、調味料の種類、残量などを確認し、明日の予定を考えてからベッドに入った。

《 5 街中探索 》

一夜明けた今日はいろいろ買い物と市場調査じゃ。イスリールに貰った金は、沢山あるとはいえ有限じゃからな。冒険者になるか、売れるモノを扱うかして稼がねばならん。

ただ、冒険者だと「じじいはひっこんでろ」ってテンプレがありそうな気がするんじゃよ。

それなら商人になったほうがいいのかもと思つての。売るモノの目星は付けとるんじゃ。お茶じゃ。

イスリールの話だと、お茶はあるが日本より美味しくないらしいの。じゃから儂のスキル《朝尾茶園》で買ったお茶を売ろうかと思つてのう。

うちでは緑茶だけでなく紅茶も作ってたからの。

ついでに売り物としてはコーヒー豆、海苔、白米もじゃな。あと茶器もいくつもあったからそれも売れるかもしれんしのう。

相場が分からんからその辺りを調べんとどうしようもないのじゃ。全く売れないとか、安すぎるようならまた別を考えるだけじゃな。

市場をぶらぶらしながらいろいろ見て回る。

食器、野菜、肉、ハーブ類、パン、保存食など必要と思われるものは買いじゃ。

【無限収納】があると腐る心配がないのはホントありがたいのう。

軽食を出す店があったので一服。

コーヒー、紅茶はあったが緑茶はなかった。

それぞれ一杯でコーヒー2800リル、紅茶3500リルとかなり高めな値段設定。高い割にどちらも香り、味共に薄かったわい。豆も茶葉もケチつとるんじゃないか？

店員に聞いたら商業ギルドが一括管理していると教えてくれ、次の目的地が決定。商業ギルドはスールの街の中心部にあった。

原価率と一杯辺りの使用量をざっくりと多めに設定しても、それぞれ100グラム10万リルはかたいはずじゃ。足元見られたら売らなくても構わん。とりあえずはギルドへの登録からじゃな。

商業ギルドは小さな役場のような外観をしておった。

……商工会議所みたいなもんかのう。

「ギルドに登録したいんじゃが僕でもできるんかのう？」

中に入り受付に声をかけると、若い嬢ちゃんが答えてくれたわい。

「商業ギルドへようこそ。どなたでも登録は可能ですが、どのような商売をなさるかで登録料、説明などが変わります。どのような形態になりますか？」

「物見遊山しながらの移動販売じゃな」

「移動販売でしたら年間登録料5万リルになります。こちらの水晶に手を当てて魔力を流していただけますか？」

受付カウンターの脇にある水晶に触れて軽く魔力を流すと、淡い光が放たれる。それが収まると水晶から欠片が落ち、それがカードの形を成していく。

「ほほう、面白いのう」

「初めて見る方は大抵驚かれますよ」

「これも魔道具の一種なんじゃろうか？」

「ええそうです。詳しいことは秘密ですが」

唇に人差し指を当てウインクする嬢ちゃん。

茶目っ気があるのう。

「説明の前にカードに血を一滴お願いします。それで所有者登録となりますので」

カードと針を渡されたので、言われた通り血を一滴垂らす。

カードが淡い光を放ち、それが収まると名前が記されていた。

【名前】アサオ・セイトロウ

【形態】移動販売

【ランク】F

「移動販売の方に限らず最初はランクFからになります。年間売上に基づいて税金が課せられるのですが、店舗を持たない方は一律年税5万リルとなっています。違法行為をして捕縛された場合はカードに記録されます。逮捕、訴追、受刑となりますとギルド員資格を

はく奪^{だつ}され、以後二度と登録できなくなります。これは全ギルド共通の規約^{きぎやく}です。なので受刑^{じゆけい}までいくようなことはしないでください」

「分かったのじゃ。平和、平穩^{へいおん}でいけばいいんじやな」

「ギルドに主となる販売品目を登録しておく、他のギルド員や各地のギルドとの売買に便利です。アサオさんは何を販売されますか？」

「食料品になるのかのう」

「では登録しますね。この情報は犯罪記録などと一緒に一括管理^{いっかつかんり}されます。ここまでは何か質問がありますか？」

「大丈夫じゃ」

「なら説明は以上です。商売頑張^{がんば}りましょうね」

小さくガツポーズの嬢ちゃん。

かわいいのう。

「ああそうじゃ。ちと知りたいんじやが、茶葉はいくらぐらいするんじや？ 店で飲んだ時に高いと思ったんじやが」

「品質にもよりますが100ランカで15万リルくらいです」

「高いのう。やはり贅沢^{ぜいたく}品じやな」

ふむ。イスリールから得た知識で単位の違いも苦勞^{あつち}せん。地球^{あつち}の1グラムがこつちだ

と1ランカじやな。

「はい、贅沢^{ぜいたく}品です。ただ貴族の方々への販売が主です。商^{あきな}いとしては何ら問題はありません」

「ほうほう。いろいろ助かったのじゃ」

登録料と税金を一括で払ってギルドを出る。

ふむ。やはりかなりの儲けを見込めそうじやな。

明日^{あした}辺り試飲用に小分けしたものを持ち込んでみようかの。それを試しに売ってから今後を決めても問題ないじやろ。

売るにしても店で一切見なかったアルミ袋のままは無理じやろうから、何か容れ物^{いれもの}を見つけないとなんのう。茶筒^{ちやづつ}みたいなものがあると嬉しいんじやが。木筒^{きづつ}、袋^{ふく}、蓋付^{ふたつ}き小鉢^{こはち}、陶器^{とうき}辺りが妥当^{だうたう}じやな。見つけたらいろいろ買っておけばいいじやろ。

市場をぶらぶらしながら木筒^{きづつ}などを採^とり、気になった物を適当に買う。

木筒や麻袋^{あし}などが無事に手に入ったのは幸いじやったな。

傍^たから見れば観光^{かんかん}に来たオノボリじい様の散財^{さんさい}くらいにしか見えんじやろうな。

市場調査^{しちやうさ}を兼ねた買い物^かもしたし、ギルドの登録^{登録}もした。

今日はもう宿屋^{しゆくや}に戻^かってのんびりじや。

《 6 試飲からのひと悶着 》

翌日。

朝食後にギルドへ売る物の選別じゃ。

食後の一服に緑茶を淹れ、〈朝尾茶園〉の画面を開く。

スキルの使い方も刷り込まれとるから迷わなくて良いのう。

まずは自分で飲む為の緑茶、ほうじ茶を各200グラム×一袋を確保じゃな。

茶園オリジナル紅茶100グラム×一〇一袋を購入。売り物一〇〇袋に試飲用一袋じゃ。

決して高級品ではないが、自家栽培茶葉を自家製造しとるから、少しでも市販品より割高なんじゃ。

豆もこだわりの逸品じゃから、ちよいとお高めになつとる。対してインスタントコーヒーは市販品なもんで、量販店より少し高いくらいじゃ。

焙煎コーヒー豆500グラム×二〇袋、インスタントコーヒー200グラム入×五〇袋

も購入。

ティーカップセット、ティーポット、コーヒーカップを数セット。

コーヒーのドリップセットに、念の為のコーヒーミルも一台買っておくかの。もしかしたら確なモノがないかもしれんしの。

電動コーヒーメーカーが使えないのは面倒じゃな。今度イスリールに頼んでみようかの。購入した物が【無限収納】に直送されるのは手間いらずでありがたいのう。まあここからの小分け、詰め替えが手間になるんじゃがな。

【無限収納】の中にどっちも入ってるんじゃから画面操作でできないもんかのう。

……おお、できる。こりゃラクチンじゃ。

紅茶を蓋付きの木筒に移して一〇〇本完成。試飲用の分は間違えないように茶園の茶筒にしてと。

コーヒー豆は麻袋に入れ換えて、インスタントコーヒーは陶器にしとくかの。

「これで準備万端じゃろ」

……一服しながら一息つけば、ふと疑問が湧いてきたんじゃが。

これだけ買々と茶園の在庫はどうなるんじゃろ？ 毎年かなりの量を作っていたが、品切れになったりせんのかのう？

今度イスリールに聞かんとダメじゃな。

商業ギルドに着いたのは昼過ぎ。昨日と同じ受付の嬢ちゃんがいた。

「紅茶を売りたいんじゃがどうすればいいかの？」

「紅茶ですか？ 少々お待ちください」

声をかけると、嬢ちゃんは受付の裏へ姿を消し、少しすると初老の男性と一緒に戻ってきた。

「紅茶買付担当のビルと申します。いかほどの量を売っていただけるのでしょうか？」
下手に出つても値踏みするかのような不躰な視線のままのビル。

「1万ランカあるんじゃないが」

「1万ランカもですか！」

こちらでは高級品な紅茶を、爺がいきなりこれだけ大量に持ち込めば驚くのも無理はないのかのう。驚くほどの量でもないと思うのは、日本を基準きじんにしているからじゃろうな。

「別室でお話を伺いうかがたいので、一緒に来てもらえますか？ その量の査定さていとなりますと立会人も必要ですのうで」

「構わんぞい。大金が動くことになるじゃろうからな」

ビルは先に話を通してけるとのこととで、案内は嬢ちゃんがしてくれた。

「アサオさん、昨日茶葉の値段を聞いていたのはこの為だったんですね」

「そうじゃ。いきなりその場で出して買い叩かれても困るからのう」

「相場が分からなかったから仕方ないですけど、それでも登録翌日に紅茶を1万ランカも持ち込むだなんて思いもしませんよ」

嬢ちゃんと会話しながら少し歩くと、ある部屋の前で止まる。

その部屋はギルドマスターの待つ応接室じゃった。

扉を開けると長髪の男性が両手を広げて待っていた。

「当商業ギルドマスターのネイサンです。紅茶を売っていただけるとか。まず品質の確認をしてもよろしいですか？」

「初めまして。昨日登録したてのアサオじゃ。茶葉の品質ならこれで確認を頼むかの」
鞆から茶筒を取り出してテーブルに置く。

見やすいように茶筒の蓋にいくらか出してネイサンに見せる。

「この容れ物も珍しいですね。いや、今はそれより品質確認です。失礼します」
手触り、香りを確認するネイサン。目つきが商人のモノに変わる。

「試飲するのが一番早からう」

ティーポット、ティーセット、お湯も取り出し、紅茶を淹れて三人に差し出す。

「色、香りとともに素晴らしい。今までのものとは別格だ」

「この器も綺麗です。こんな綺麗な白の器なんて初めて見ました」

「私は紅茶自体そんなに飲んだことはありません。恥ずかしながら」

思い思いの感想を述べるネイサン、ビル、嬢ちゃん。
好感触こうかんじよくじゃな。

「で、いくらじゃ？」

あまり時間をかけても仕方ないので、単刀直入じゃ。これで即答できないなら他にしよう。

「100ランカ12万リルでいかがでしょう？」

「相場は100ランカ15万リルじゃないのかの？」

「それは以前の相場です。今はもっと下がってますのでこの値段になります」

「ふむ。帰るのじゃ」

全てを鞆に収納して席を立つ。

「ま、待ってください。安すぎでしたか」

「当たり前じゃ。自分たちの指、鼻、舌で最高品質と納得したんじゃろ？ それなのにそんな値段では、売るのがないじゃろう。他にいくだけじゃ」

目先の儲けに釣られて欲をかきすぎじゃ。

「儂としてはこのギルドに登録したから売ろうかと思っただけじゃ。別にここで売らねばならん理由は全くないからのう」

当面の資金もまだまだあるからこれは事実じゃ。侮られてまで売る必要は全くないんじゃよ。

「分かりました。この品質のモノを仕入れない馬鹿はいません。100ランカ20万リルでいかがですか？」

「それは真つ当な相場じゃな」

立ち読みサンプル はここまで

「ではそれで」

ネイサンが言い終わる前に言葉を付け足していく。

「ただ軽く馬鹿にされたからのう。誠意^{せいい}くらいは見せてほしいんじゃよ。ダメかのう？」

目を見開き、思わずビルを見るネイサンじゃが、彼は味方であっても若干立場が違う。

良い品を仕入れることが一番大事な紅茶担当者。そんな者が目の前にある最高品質の仕入れの機会を逸^いするはずもない。力強く頷^{うなず}かれると、ネイサンはこう言うしかなかった。

「……100ランカ23万リルでお願いします」

「……^{にがむし}……」
苦虫を噛み潰^{つぶ}したかのような渋い表情で、声を絞り出してネイサンは小さく答える。

その値段で仕入れても全く問題ないくらいの利益は出るじゃろ。

「それで手を打とうかの。ここに全部出せばいいのかの？」

「ビル、量^{はか}ってください。私はアサオさんとまだ商談がありますので」

木筒100本を鞆から出してテーブルに並べる。

ビルは部屋から一度出て、量りを持ってまた戻ってきた。儂から見える所で計量をするようじゃな。

「で、商談の残りとは何じゃ？」

「この茶葉の仕入れはどちらからなんで」

「教えるわけないじゃろ」